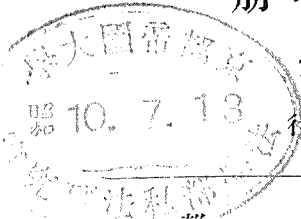


哲 學 研 究

第 七 冊 第 二 十 二 卷

第 二 百 三 十 二 號

昭 和 十 年 七 月 一 日 發 行



(大正五年四月六日第三種郵便物認可)昭和十年六月廿五日印刷納本(毎月一回一日發行)

プラトーンに於ける知識への道(承前).....

長澤信壽

歴史的真理と歴史的認識の方法.....

文學士 山良哲次

集合論の所謂「矛盾」に就て(承前).....

文學士 近藤洋逸

雜錄、新刊紹介、其他.....

京 都 帝 國 大 學 文 學 部 內

京 都 哲 學 會

京都哲學會規則

- 第一條 本會ヲ京都哲學會ト稱ス
- 第二條 本會ハ廣義ニ於ケル哲學ノ研究及其普及ヲ以テ目的トス
- 第三條 本會ハ前條ノ目的ヲ達センガ爲メ左ノ事業ヲ行フ
- 一、毎月一回研究會ヲ開ク
 - 一、毎年公開講演會ヲ開ク
 - 一、毎月一回雜誌『哲學研究』ヲ發行ス
- 第四條 本會事務所ヲ京都帝國大學文學部内ニ置ク
- 第五條 本會ノ事業ヲ經營スル爲メニ左ノ役員ヲ置ク
- 一、委員(若干名)京都帝國大學文學部哲學科教官及委員會ニ於テ推薦シタル者ヲ以テ之ニ充ツ
 - 一、書記(一名)委員會ニ於テ囑託ス
- 第六條 本會ノ趣旨ニ賛同スル者ハ何人ニテモ會員タルコトヲ得
- 學校、圖書館、教育會、其他ノ團體ハ其團體ノ名ヲ以テ入會スルコトヲ得
- 第七條 會員ハ會費トシテ年四圓四拾錢、前後二期ニ分チテ前納スベキモノトス
- 第八條 會員ハ本會ノ諸種ノ會合ニ出席スルコトヲ得、且ツ雜誌『哲學研究』ノ配付ヲ受ク
- 第九條 本會規則ノ改正變更ハ委員會ノ決議ニ依ル

京都哲學會役員

委員

文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士
天野貞祐	岩井勝二郎	植田壽藏	白井二尙	小島祐馬	木村素衛	九鬼周造	田邊元	中井正一	西谷啓治	野上俊夫	羽溪了諦	波多野精一	服部英次郎	本田義英	山内得立

前 號 目 次

積極的事實について……………	文學士 赤松元通
プラトーンに於ける知識への道(承前)……………	長澤信壽
集合論の所謂「矛盾」に就て……………	文學士 近藤洋逸
彙報、其他……………	……………

告 會

一、本會へ入會希望者ハ京都市西洞院七條南内外出版印刷株式會社内京都哲學會宛テニ規定ノ會費(前表紙裏ニアリ)御納付ノ上御申込被下度候
 二、會員ニシテ轉居入退會等(編輯事務以外ノ一切)ノ事務ハ内外出版印刷株式會社内京都哲學會へ御通知被下度候
 三、會費ハ振替口座大阪叁〇六六三番 内外出版印刷株式會社内京都哲學會宛テニ御拂込被下度候
 四、本誌ノ編輯ニ關スル通信及紹介・新刊書・寄贈雜誌等ハ凡テ本會宛テニ御發送被下度候
 京都帝國大學 文學部内 京都哲學會

註 文 規 定

● 會員にあらざる購讀者の御註文及び廣告に關する件は内外出版印刷株式會社へ御申込下され度候
 ● 本誌の御註文はすべて代金郵税共前金にて御送り下され度候
 ● 振替貯金にて御送金の際は(振替大阪三九三一番東京三九三一番)内外出版印刷株式會社宛に願上候
 ● 前金切れの場合に帶封に「前金切」の印章捺捺致すべきに付直に御拂込下され度候
 ● 特に請求書及領收書等必要する場合は郵差參錢御送付下され度候

定 價

冊	數	定 價	郵 税
一冊	冊	金 四 拾 錢	金 壹 錢
六冊	冊	金 貳 圓 四 拾 錢	不 申
十二冊	冊	金 四 圓 八 拾 錢	不 申
	前金	金 四 圓 八 拾 錢	受 取

廣 告 料

一頁 金參拾圓 半頁ハ取扱不申

昭和十年六月廿五日印刷納本
 昭和十年七月一日發 行 第 二 百 三 十 二 號 第 七 册

京都帝國大學文學部内

編輯者 京 都 哲 學 會

右代表者 服 部 英 次 郎

發行者 須 磨 勘 兵 衛

印刷者 須 磨 勘 兵 衛

印刷所 内外出版印刷株式會社

發 行 所

京都市下京區西洞院七條南

内外出版印刷株式會社

振替口座 大阪三九三五番
 東京三九三一番

本社 京都市下京區西洞院通七條南入
 販賣所 京都市日本橋區本銀町三ノ十四 内外出版印刷株式會社

賣 捌 所

(東京) 寶文館 東 海 堂
 (大阪) 寶文館 北 隆 館
 (神戸) 寶文館 上 田 屋
 (京都) 共 盛 社 川 瀨 書 店 參 文 社

不許複製
 禁 轉 載

明治大學教授 大島

豊譯

四六版三五〇頁
クロース上製美本

定價 貳十圓
送料 四圓

ブルガコフの悲劇

世界的著名

ブルガコフは一八七一年ロシアに生れ前世紀の終頃迄「合法的マルクス主義」の重要な代表者であつた然るに廿世期の初頭には既に全くマルクス主義から離脱し一九〇三年には「マルクス主義から觀念論へ」によつてマルクス主義批判者として現れるに至つた。其後彼の思想は、觀念論から更に神秘的宗教的な發展をたどり、哲學的思惟の必然的行詰を認め、それは宗教の婢女としてのみ更生し得ると云ふ考へにまで到達したのである。彼は本書に於て古代から現代に至る西洋哲學史の發展の跡をたづね、特にスピノザ、カント、フイヒテ、シエリング、ヘーゲル、等の根本思想を吟味する事によつて、哲學的思惟なるものは其が理性によつて、すべてを解決せんと企てるものである限り必然的に一面性に落入らざるを得ない事を論證せんとしてゐる、かくして全哲學史は、理性によつては解決し能はざるものを、飽逆理性によつて汲みつくつてさんとする悲劇の連続である、哲學はいかにして此宿命的な悲劇から免れうるであらうか。ブルガコフによれば、眞實在の眞の姿は三位一體的なものであり、哲學が宗教の上立ちて宗教を説明せんとする僭越をやめて、むしろ宗教から光明を仰がんとする事によつてその最高使命の自覺を意味づけると云つてゐる、彼がマルクス主義から觀念論を経て、更に宗教にまで至り、こゝに始めて安住の地を見出したと云ふ事は當時のロシアの世相と共に、現在の日本の世相及思潮とも大いに通ずるものがあるであらう。敢へて讀書子に推薦する所以である。著者はかつて、經濟哲學、マルクス主義より觀念論、曉天、等の著述がある。

發行所

東京市小石川區
竹早町三五

モナス

振替東京六三八五四番
電話小石川五四四六番

(大正五年四月六日)昭和十年六月廿五日印刷納本(毎月一回)
三種郵便(認可)昭和十年七月一日發行(行一日發行)

哲學研究 第二百三十二號 定價金四拾錢

郵税金壹錢